

佐伯を素材とした

独歩の作品 (中)

山内武麒

(賛助員・佐伯市城下東町)

(五) 鹿狩

この小説は明治三十一年八月十五日発行の雑誌『家庭雑誌』第十二巻百十九号に発表され、第一文集『武蔵野』にも収められた。

『欺かざるの記』の二十六年十二月五日の記に、

「二日は土曜日、三日は日曜日、土曜日の夜―鹿狩りに誘われ、弟と吾と合して十名、桂港より乗船して猿渡と称する浦前に着き、明くれば日曜日、終日野山に狩り暮らし其夜は猿渡に宿し、四日朝、吾等五名は陸地より徒歩佐伯町に帰る」

とある。これを主材としてこれを書いたに間違いない。

「鹿狩に連れて行くか」と中根の叔父が突然に言ったの

で僕は狼狽した。

「面白いぞ。」

連れて行くか

か」人の善い

叔父はここに

こしながら勧めた。

と書き出して、主人公の僕を十二歳の少年として書かれている。

そして同行することにする。鹿狩に集った人々はみな町の上流の人達で、中根の叔父は銀行の頭取であるし、判事もいたし、郡長もいた。その中で今井の叔父さんが一番声が大きいき、一番元気があり一番面白そうであっ



二の丸よる見る本丸跡

た。また一番太っているし一番年をとっていて、僕が一番気に入った。

同勢十一人は、その夜おそくかの字港（葛港）を船に乗って出発し、船の中では大人たちは早速酒盛りを初め、酔ってみんな寝てしまう。そしてまだ夜の明けぬ中に、つの字崎（鶴見崎）の浦まえ（猿戸）に着いた。一軒の漁師の家で夜の明けるまで休息し、夜が明けると鶴見崎の山の背に登り、加勢に来た猟師たちと一しよにいよいよ猟が始まった。

僕は今井の叔父の傍から離れずについて廻り、猟の様子を見物した。犬が鹿を追い出した。生きている鹿を見るのは初めてだ。その鹿が撃たれた。そばに寄って見るとまだ角のない大して大きくない鹿だった。

昼飯時になり今井の叔父と草の上で弁当を食べた。叔父は腰にさげた瓢箪の酒を飲み、弁当を食べ終ると草の上に眠ってしまった。この時小藪の中がさがさしてこちらへ近づくものがある。見ると枝のある大きな角が見える。大きな鹿だ。叔父を起そうと思ったが起すと叔父の声で鹿は逃げてしまうだろうと考えて、叔父の鉄砲を把ってその鹿をねらって射った。うまく当たった。鉄砲の

音で叔父は飛び起きたが、見事鹿を仕留めたのを見て、僕に抱きついて喜んだ。

一日中山野をかけ廻って猟をして六頭の鹿を射った。その中で僕の射った鹿が一番大きかった。

帰りにも今井の叔父と一しよに陸を歩いて帰った。それからその後のこと。

今井の叔父の独り息子の鉄也さんが鉄砲腹で死んだ。この鉄也さんは四五年前から気が違って全く廢人になっていた。それでも独り子に死なれた叔父は大そう悲しんだ。そこでこの僕が今井家の養子として貰われていった。以上がこの小説のあら筋である。

この小説に出てくる中根の叔父にしても、今井の叔父にしても性格が明るく磊落でユーモアたっぷりな描かれである。独歩は人間の持つユーモアの中に、深く秘められた人間性に心を強かっていたのであろう。

(六) 小春

この作品は明治三十三年十二月五日発行の雑誌『中学世界』第三卷第十六号に発表され、後に第一文集『武蔵野』に収められた。

この「小春」は、独歩が生涯を通じて大きな影響を受けたワーズワースとの邂逅について語るものとして重要なものである。

「十一月某日、自分は朝から書斎に籠って書見をして居た。其書はワーズワースの詩集である。此詩集一冊は自分に取って容易ならぬ関係があるので、これを手に入れたは既に八年前のこと、忘れもせぬ九月二十一日の夜であった。あゝ八年の歳月―憶へば夢のようである」と書き出してある。

明治二十五年九月二十一日の夜、山口県の麻郷村から上京して早稲田の鶴巻町に下宿していた独歩は、神田の中西屋のあたりで、このマクミラン版のワーズワース詩集を手に入れたそうだ。独歩はこのワーズワースの「哲学的な詩」を「考える詩」としてうけとり、深く親しんだ。

久しぶりにワーズワースの詩集を読み返しているうちに、この詩集をひとときも手離なさずに読み耽って、深く心酔した佐伯時代のことを追憶した。

この「小春」の三に、

「自分が最も熱心にワーズワースを読んだのは豊後の佐伯

に居た時分である。自分は田舎教師として此所に一年間滞在して居た。

自分は今ワイ河畔の詩を読んで、端なく思い起すは実に此一年間の生活及び佐伯の風光である。彼地に於て自分は教師というよりも寧ろ生徒であった。ワーズワースの詩想に導かれて自然を学ぶ処の生徒であった。成程七年は経過した。然し自分の眼底には彼地の山岳、河流、渓谷、緑野、森林悉く鮮明に残って居て、我故郷の風物よりも幾倍の色彩を放って居る。何故だろう？

「月光をして汝の逍遙を照らさしめ」自分は夜となく朝となく山となく野となく殆ど一年の歳月を逍遙に暮した。「山谷の風をして恣に汝を吹かしめよ」自分は我が情と我が身を投出して自然の懷に任かした。敢て佐伯を以て湖畔詩人の湖国と同一とは曰はない。然し湖国の風土を叙して、

此処には雨、心より降り、晴るゝ時、一段映ゆき天気を現し、鳴らざりし泉は鳴り、響かざりし滝は響き、泉も瀧も、水溢るれど少しも濁らず、波も泡も澄み渡り青味を帯べり。

とワーズワースが言いしを真とすれば我が佐伯も実に其通りである。

往々雨の丘より丘に移るに当りて、或は 近く或は遠く、
或は幽く或は明かに

というも亦た全く同じである。若し夫れ雲霧を説いて、

或は黙然遊動して谷より谷に移るもの、往々にして動か
ざる自然を動かし、変らざる景色を変え、塊然たる物象を
化して夢となし、幻となし、霊となし、怪となし

というに至っては水多く山多き佐伯も亦た実にそうである。

(中略)

たゞ一言する。「自分が真にラーズナルスを読んだは佐伯
に居る時で、自分が尤も深く自然に動かされたのは佐伯に於
てラーズナルスを読んだ時である」ということを。

と記してある。独歩はいつも外出する時は、このワーズ
ワースの詩集を懐にしのぼせ、閑さえあれば読みながら、
心ゆくばかり佐伯の自然風光の中にとけ込んだのである。

こうして佐伯のことを懐しく追憶しているとたまらな
くなって、『欺かざるの記』を拾い読みしてその時の風
光を思い浮べている時に、小山と言う青年が訪ねて来る。
この青年は絵を画くことを唯一つの趣味としていた。そ
して独歩はこの青年の求めに応じて『欺かざるの記』の
中から拾い読みをして聞かせる。

初めに十一月三日の記から読み出した。すなわち、小
春日和のよい日に弟収二と女島へ散歩し、土堤に並ぶは
ぜの紅葉の下を通過して番匠川の川口附近に行つて休み、
干潮であらわれた洲の上を群れ飛ぶ鳥の群を見、水門を
下ろす子供、灘へ渡ろうと潮を待っている子供を見る。
はぜの紅葉が浜風に吹かれてかゞやき、百舌鳥のあわた
ゞしい鳴き声、鋭く羽風を切つて飛ぶ魚鷹みぎとなどを見る、
などを叙した記である。

その次が十一月二十二日の夜の記で、月の光に誘われ
て弟収二と船頭河岸へ散歩し、渡し舟で馬を向う岸へ渡
す風景と、そのあたりの情景―埋髪所の燈火、その前に
集つて唄を歌う子守女―を叙した記である。

またその次が十一月二十六日の記で、午後土河内村
(津志河内の誤り)を訪うた記である。

そうしてその外二三編を読んで聞かせた。これを聴く
青年より読む独歩の方が當時を回想して胸がつまるよう
な思いがした。そして、あれからもう七年が夢のように
過ぎてゐる。何だか夢からさめたようだと言つて懐している。
それから二人は家を出て野原に出た。そして高台に出
るとあたりが急に開けて林の上に見えかくれして国境の

山々がかすんで見えた。

「山」と思わず叫んだ。そしてふと想い出したのは佐伯に居る時分、元越山の絶頂から遠く天外を望んだ時の光景だった。この山を見て一種の哀情を催したと叙してある。

それから小山は絵を画く、自分は書物をひろげた。しかし読書にも身が入らずたゞ林の静けさに身をまかせていると、小山が突然、

「兄さん、人の一生を四季に喩えると、春を私のような時として、小春は幾歳位に喩えたらよいでしょう」と尋ねた。

「秋かね？」

「秋と言わないで、小春ですよ」

「僕のようなのが小春だろう」と何心なく答えて、われ知らず、今まで経験したことのないような哀情が胸をついて起った。

「君が春なら僕は小春サ、小春サ、いまに冬が来るだろう」

「ハ、ハ、冬が過ぎれば又、春になりますからねエ」と小山は軽く答えた。

あたりは再びひっそりとなった。小山は口笛を吹きながら描いている。自分は思った。寧ろ此二人が意味ある画題ではないかと。

と結んである。

この小春という小説は、ワーズワースの詩から、七年前住んだ佐伯を想い出し、そのなつかしさにたまらなくなって作ったものである。美しい詩のような小説である。

(七) 独語

この随想は明治三十四年九月五日、十月五日、十一月十五日に発行された雑誌『明星』の第五号、第六号、第七号に載ったものである。署名は国木田哲夫であった。

「余の日記は明治二十六年二月四日に初りて三十年五月十八日に至る。題して『欺かざるの記』という。

余は明治四年に生る。故に『欺かざるの記』は二十三歳の春に初りて二十七歳の初夏に至る。五ヶ年に跨る日記、紙數八百余枚、事実と感情の告白なり。

既に題して『欺かざるの記』と称す、初より他に示すべき性質の文字に非ず、又他が読で多くの興味を感ずべき記録に非ず。

而も今日、此紙上を借りて其一端を世に示さんと欲する理由、他なし、昔日の「余」は今日の「彼」にして、今日の余よりして彼の告白を見る。要するに亦幾編の叙情詩なればなり。

且つ彼すでに明治の児なりとすれば、彼の思想や感情の告白や、要するに明治の時代の特徴を語らずや。

思うに明治の児にして彼が如き者、決して少からじ。国の武装の完備、国の法治の成就、国の交通の便益、国の商工の繁盛等をのみ明治の光榮となす世に於ては、彼が如きもの殆ど有て無きが如し。

無きが如しと雖も、彼等は確かに明治の児なり。明治は彼等を生めり。

則ち渺たる彼の告白、亦一顧の値なしとせんや」と序文を書いて、第一節は佐伯に鶴谷学館の教師として赴任する以前、すなわち職に就かず、職を求めようともせず、東京市内に下宿して読書と空想と煩悶とに其日を送っていた時の日記である。二十六年の八月四日、二十二日、二十四日、二十七日、九月十九日、二十六日の六日の記を抜き出して書いてある。九月二十六日は山口県の熊毛郡で書いた日記であるが他は全部東京麹町の下

宿で書いたものである。内容は略する。

第二節はその初めに、

「これ彼が田舎教師として約一年間、豊後国佐伯町に滞在せし時の日記なり。則ち二十六年九月三十日より二十七年八月一日に至るまで、人の子を教えつゝも自ら学ぶ処あり、苦しみつゝ悶えつゝ又自然の特殊なる恩寵を得て限りなきの慰藉を得たる。彼が今日までの生涯に於て尤も幸福なりし時の日記なり。今はたゞ左の数十節を抜くのみ」

と前書を書いて、次の日記を書き抜いてある。

十月四日（二十六年）

秋雨がしとしと降ってもの寂しい。

昨日始めて学館に出て、開講、初対面の挨拶をした。

吾をして少年を愛せしめよ、あゝ吾をして少年をあやまらしむる勿れ。と決意している。

夕暮れ時弟収二と散歩して、暗い道をたどって城山の後に行く。道々弟に人生観について語る。

十月十七日

洪水の後漸く晴れる

本日は新嘗祭（神嘗祭の誤り）で、午後弟と共に城の側面から下村（鶴岡村）の山谷をわたり坂を越えて坂の

浦へ行く。そして山麓の崖の下を廻って葛に出て帰る。

この道で見たものをあげてある。

十月二十八日

この頃の秋の日のうららかなさをたゝえてある。

十一月四日

昨日天長節で学校が休みであったので、午前弟と一しょに女島へ行く、日の暖かい小春日であった。道のはぜもみじ、洲の鳥の群れ、水門を下ろす童、灘へ舟を渡そうと潮待つ若者、野末で鳴く百舌鳥の声、目が輝き鋭く羽風を切る魚鷹なまごを叙し、女島の山のこと、その村の様子を書いてある。

夜はまた一人で散歩して、もの寂しい土族屋敷から暗い貧しい古河町（古市町の誤り）を歩いて、その様子を書いてある。

今日も浦代峠の中腹からたちのぼる白い煙を見る。寓居の窓から見たのであろう。

午後登校して四時に帰宅し散歩に出て、臼坪の前を通る。刈入り時の様子を書いてある。

十一月六日

昨日元越山へ登った記。寓居の窓から朝夕眺めて登り

たいと考えていた山である。

弟と朝八時出発、秋晴れの絶好の日、船頭河岸から立のおろし（渡船）に乗り、川を下る兩岸の景色にみとれ、乗り合せた客の面白い話を聞く。

木立に着いて浦代峠の頂の茶屋で道を聞くと道を間違えたという。また坂を下るのは面倒と道もない処をよじ登る。背丈けほどある羊歯をふみ分け、手も足もきまずだらけになって遮二無二に登り、ようやく本道に出て登ると地蔵像がありその傍に休んでいた老いた樵夫と会い、頂上への道をきゝ絶頂に登りつく。その大観にたゞ驚くばかり、何とも名状し難く涙にくれた。

十一月二十六日

一昨夜、月明に誘われて葛まで散歩した。

家を出て臼坪道を出て港に通ずる大路に出て波止場まで行き、その風光を叙し、塩浜の景色、蟹田の船大工、鍛冶屋の様子を書いてある。

木曜日二十三日の夜、月に誘われて船頭河岸に行き、馬を渡し舟で渡す様子を書き、自分たちも渡し舟に乗り、川の中流から眺めた河岸の様子を記してある。

十一月二十七日

昨日は日曜日、午前は教会に出席し、午後土河内村（津志河内の誤り）を訪うた記である。

堅田隧道の前の小道から坂を越してすぐある農家の様子を書き、渡し舟で土河内に渡りその村を訪ねる。麦まきで村中忙しいが、その村の中は静かでもものさびしい。村の様子を記してある。

十二月七日

生命は永久に滅しない活動、希望、愛情、進歩の連続であることを願っている。

十二月十二日

十日の日曜日に堅田道を通って教村を訪ね、柏江まで行ったことを記してある。

十二月十七日

昨日生徒に授業している時に急に思ったこと。この朽ちる生命、何をしようのかと自分を省みて笑った。また今朝目が覚めてガラス越しに灘山の背後に朝陽の輝くのを見て感じた。あゝこの大きな自然、美しい自然。確かにある自然、われは人である。お前の中に生きている。お前は老いない。自分がどうして老いようか、自分がどうして死のうか。と書いてある。

十二月二十日

弟と散歩して例のように城山を一周した。いつもの八幡（若宮八幡）の社前に行くと、笛と太鼓の音がして、鳥居の前の老杉の傍に二統の旗が立っていた。

雨の中を岡の谷へ越える。雨のそば降る谷の風景を筆細かに巧に描写してある。

この佐伯での記は独歩の散歩記といってもよいであろう。散歩好きな独歩は閑を見つけては近郊を歩き廻った。そして自然を親しみつゝ人生を考えた。

この文は『欺かざるの記』の本文を少し書き換えてわかり易いようになっている。

(つづく)

